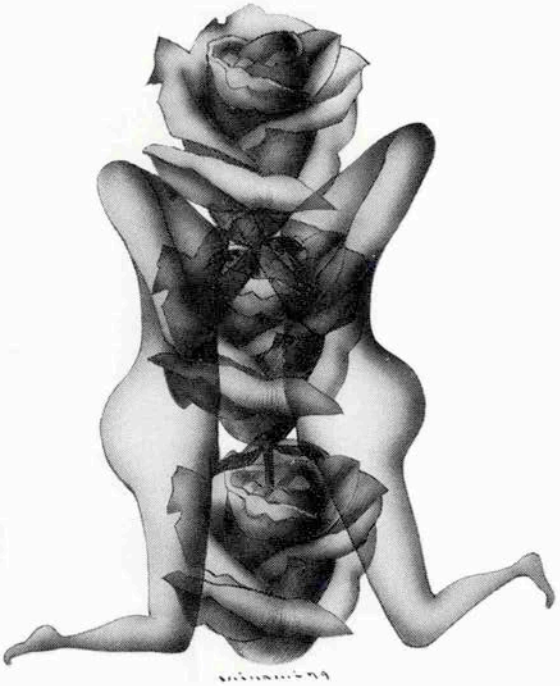
第3回神戸女流文学賞受賞作品

夢の消滅 2

大原由記子

え・南和好



実桜は頬の毛布の柔らかな感触と遠くから見つめられる視線のあたたかさに、疲れていた体が徐々に溶け、溶けていくかと思うと疲労感のなかへまた落ちこむのを、自虐的なゲームのように繰り返した。恵の存在が安楽であり苦痛であることに変りがなかった。それは自分の身近に他人がいて同じ空気を吸い自分をみつめることへのどうしようもない怒りであり、この怒りは恵であるからこそ柔らげられるものでもあった。

両手で毛布を撫でてみる。よそよそしい手触り。とろりとした空気が指に絡まる。恵の視線。氷のような目差し、見る者すべて凍らせてしまう。「なぜそんなに見つめるの」Sは少しも表情を崩さずに言った。美しい湖の

面のように、どんな風もSを動かすことはできなかった。しかしKはただ呆然としてMを見つめていた。Kの子供っぽい潔癖さが悲しみと怒りにうちふるえ、顔面が真青になるまでそんなにかからなかった。週末の午後の日の下で秘密の性を嘗めたゆるやかな時間は、温室の戸をぱたんと開けたMの出現で、ひりっと凍りついてしまった。ひそかに甘い息をしているのはSだけだったかもしれない。Mの幼ななじみのKもこの恋愛ゲームに入れましょうよ、と言っていたSなら、どんな演出も考え出すだろう。すべてが真実らしく、うそらしく見える昼間を選び、SとMの共有の場所である温室を選び、Mと兄妹のように仲のよいKをSとMの共通の共犯者にしてしまい、感情のトライアングルを成立させようとした。あの土曜の午後、Mは初夏のけだるい熱気のなかで開きはじめた薔薇の香りと、乾燥したわらの匂いと、草いきれのむっとする水々しさと、SとMの膚の匂いに包まれていた。いつも甘ったるい蜜の匂いが漂っている温室が、その日は悲劇的な一枚の風景のように、妙にメランコリックなものをMに抱かせてしまった。逃げ出すことも声をかけることも、ためらわれた。手足を動かすことも容易にはできなかった。そこらじゅうにSのにせの言葉とKの愛撫が溶けていた。密度の濃い空気がMの動きを緩慢にしていた。「なぜそんなにみつめるの」、Sは言った。ぴいんと張られていた面に、言葉だけがはじけていった。Mは無表情に立ちすくんだ。悲しいわけでもなかった。二人を許せないなどという感情は少しも湧いてこなかった。ただ初夏の日射しが明るすぎ、二人の体温で温室がいつも以上に暑かった。Mは体が重く冷たく沈んでいく思いがした。温かさだけがぐるぐると頭のなかで空回りした。貧血を起こした。

「ぼくを許してくれ」

Kはクラブにも出なくなり鬱積した感情を日のあたらない図書室で、本や絵で消化していた。

「許す。あなたを許すようなことは何もないわ」

「許してくれないと言うんだね。磯村冴子とあんなことになってしまったのは、ぼくのせいだ」

「大業なことではないのよ。磯村さんと会いたければあの温室を使えばいいわ。私は平気」

「うそだ。君は真青になって倒れたじゃないか」

「あなたたちと関係ないの。暑さと明るさのせいよ。私が貧血症なのは知ってるでしょ」

Kはあれから温室での出来事を話題にはしなかった。次の日にはいつものようにMと映画を観に行った。Sとても同じことだった。決して口には出さないことで三人の存在が、何か確かな意味を持ったようだった。

実桜はうとうと眠っていた気がした。一瞬、記憶がとぎれていた。体温が二、三度上り胃の痛みも消えてしまうと、どうして冷たい体で街を彷徨っていたのか不思議に思われた。

「恵、どのくらい眠ったのかしら」

実桜は髪をかき上げながら、ガウンをはおると、壁にもたれて坐っている恵の横に並んだ。

「二分」

「たったそれくらいの間」

「そうさ、その間に煙草を二本呑んだよ」

恵はコーラの空罐を灰皿代りに使っていた。

「灰皿なら机の上にあるわよ」

「ぼくがいた跡をこの部屋に残したくないと思ったのさ。君の寝顔を見てたらね。ぼくは表のポリバケツに罐をすてるだけ、それだけ」

実桜は冷蔵庫からチーズとスモークサーモンを取り出し、水割にそえて持ってきた。

「召しあがれ」

「君こそ」

実桜はだるそうに壁にもたれて水割を飲んだ。あたたかさが胃の奥から広がった。

「このアパート引っ越すわ」

「いつ」

「まだ決めてないのよ」
「そう、実桜、今日君に会う前に珍しい人に会ったよ。何年ぶりだろう」
「誰」
「磯村冴子」
実桜は昼間の熱っぽさが急に頬に蘇えった。冴子から手紙が届くや否や、恵の口からも冴子の名がとび出す。凍結されていた名前が突然に息をふきかえす。しかし吐き出された名前は磯村冴子ではなく、恵の体温を受けた別人のようになまなましい。
「君たちはこの大学に来て以来ずっと会ったこともなかったのかい。磯村冴子が君より三歳年上でもう卒業したとしても、一年間は同じ建物に通ってたことになるじゃないか。まして中学、高校は同じ女子校だったじゃないか。すれちがうこともなかったの」
「一度も」
実桜はきっぱりと言った。狭い廊下をすれちがうときに冴子と同じような香りを嗅いでたちどまることはあったが、振りかえると見も知らぬ学生が何冊かの本を抱えて通りすぎた。すると香りまでもまったく冴子のものとは別に思えた。冴子と同じ大学へ行き、同じ街に住むという楽しみは、冴子の不在でこなごなに壊れ、壊れた夢の破片はその瞬間から尚一層美しく輝いた。冴子の不在はいつものゲームにちがいなかった。完全なSの不在は強烈なSの存在を感じさせた。わざとゲームの開始を遅らせていると思わざるをえなかった。
「年が明けて銀世界になったらね。彼女といっしょに住もうと思うの」
「磯村冴子といっしょに」
恵は吐息のようにほわりと白い煙を吐いた。
「今、会ったこともないと言ったろう」
「ええ会ったこともなかったわ。今日手紙が届くまで葉書一枚もらったこともなかった。ふってわいたように彼女の存在が浮かび上がり、恵までも彼女の匂いを運びこんでくる。へんな日だったわ」
そう言い終るや否や、実桜は手紙が今日届くことも、恵となにげなく会ったということも、冴子があらかじめ計画していたことに思えた。
「また君たちの大好きなゲームを始めるつもりかい。ぼくはもうからかわれるのはごめんだ」
「あなたをまきこむつもりはないわ」
「じゃあ、ぼくが磯村冴子より前にいっしょにくらそうと言ったら、君はついてきてくれたかい」
「そうね。ノンとは言わなかったでしょうね。でも彼女にもノンと言わないわ」
「君はまだ厭きないのかい」
「わからないわ。とうに厭きてるのか、まだ何かを求めようとしてるのか、ただ流されるように流されていたい。自分の存在を認めてくれる人がいれば、その人のために存在し、愛が必要だというなら、愛されたふりをしたげる。無理したくないのよ」
「じゃあいったい片瀬実桜はどこにいるんだ。自我がないというんじゃあるまい。ぼくの知る限り君は強烈な自我を持った女だ」
「恵がそう思うなら、それが私なんでしょ。しかしそれが私のすべてじゃないのよ。透明になれたらどんなにいいかと思うのに」
「あい変らず君はナルシストだな。透明になってぼくの方こそ、君の一日を見張っていたいよ。君が洗濯したり掃除したりする時には、赤字でノートをつけてさ。君の魔女的イメージをダウンさせたいよ。君こそ家庭的な女だと納得させたところで、ぼくは君をぼろ切れのように捨ててみたいよ」
「そうしてくれたら、一生恵を想い続けるでしょうね、どうやって復讐しようかと。でも記憶力の低下が最近いちじるしいから、復讐なんて一年も覚えてないかもしれない。日一日と老いていくのがわかるもの」
「まるで君はお化けだな。悪酔しそうだ」

恵は腕時計をのぞいた。

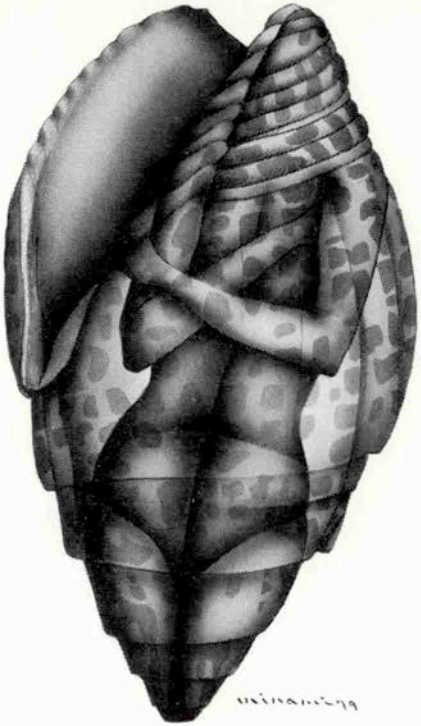
「これからバイトだ」

「中年のおばさまにたっぷりサービスすることね」

恵はふらりと立つとそのまま玄関のドアに手をかけた。実桜の位置から恵の姿は見えなかったが、かすかな気配から靴をはいてる様子がうかがえた。実桜は両手で体を抱いた。背中の骨っぽさが手の平に感じられた。恵が静かにドアを閉めたのに微妙な振動が密室に広がった。車に乗ったときの不快な圧迫で耳がツーンとするような感覚に似ていた。

サッシをあけて空を見上げると刃物の輝きで星が輝いていた。明日は雪かもしれない。実桜は身震いした。公園の東側から車のライトが繁華街へと流れた。恵の車だろう。グラマラスな重役婦人とひょろ長な過保護息子のもとへ家庭教師としてもぐり込めば、恵は二、三分もすれば何かこっけいなあたたかさに包まれるだろう。

ウイスキーをころばせながら目下の闇をのぞくと、公園のあちこちにともる灯がちらちらとグラスの面をすべっていく。じっと目を凝らせば凝らすほど灯はゆらりとウイスキーに溶けてしまう。溶けたところをごくんと飲む。



長い一日だった。何かが始まろうとしているのか、今何かが終ってしまったのか。日が上るまでの暗さの中でどうやって過ごそうか。どこで眠ろうか。否今も本当は柔らかな毛布に包まれ、自分の膚の匂いのなかで眠っているのかもしれない。外気の湿っぽさもひりっとした冷たさも、膚に痛いほどつきあたる刃物のような風も、どろりとした黒い闇に流れるネオンも夢かもしれない。夢を今も見続けているのかもしれない。

実桜はばたんと窓をしめた。

磯村冴子は乱暴に黒薔薇の束と四角い衣装箱をソファーに置き、溜息をついた。火のついていない暖炉に新木をくべると湿っぽい植物の匂いが居間に漂う。人の気配はまったくなく、雪あかりのために部屋のなかが妙にしいんと沈んでいる。

実桜はまだ起きてないのだろう、だとすれば温かな空気と薔薇の香りを用意してやろう。冴子はドアが閉められたままの隣室に目をやった。まだ夢のなかにどっぷり実桜はつかっているのだろうか。

飾り棚から大理石の大きな壷をとり出し、三十本ほどの薔薇を活けた。薄暗い部屋の色彩に花の生気もそこなわれ、薔薇はかさかさしたドライフラワーのように人工的に見える。冴子は飾り棚の横の楕円の鏡をのぞいて髪を直す。美容院に行って極めて短かくカットし、グレーに近い色に染めてきたばかりなのだ。指で頭を撫でると、外国の少年のように思えてくる。色の白さと彫の深さが若さと老いを同居させていた。

ふと人の気配を背筋に感じると、鏡のなかに実桜の顔があった。

「やっと起きたのね」

実桜は返事もせずにだるそうにソファーに腰をおろした。このしやかな生き者は起きぬけはいつも不機嫌だと冴

子は思う。この家にやって来た日から毎日少しも変らない。

「髪型変えたのね。ステキだわ」

実桜はまだ眠りのベールに包まれているような円やかな声を出す、まるで子猫の鳴き声のような。

「実桜にドレスを仕立ててきたわ。気にいるかしら」

四角い箱を手渡すと実桜はちょっとほほえんで箱をがきがさと開ける。ほとんど物に興味を示そうとしない実桜も、身につけるものには最大の関心を示す。

「ねえ、今着てみたいわ」

実桜はベージュのジョーゼットのロングドレスを鏡の前で体にあてる。さっきまでの不機嫌さはどこかへ消え、はにかむようなういういしさが少女を包んでいる。しんしんと雪が舞う人里離れた大原の里を選んだのも、この幻想と現実の脆い分岐点に立って美を享受するために、あえて不便な地を住居にしたのである。人の匂いもなく俗っぽい車の音も聞こえない。ただしんしんと雪がつもる気配と形のない言葉と沈んだ色彩の部屋、それだけが今の現実であり幻想への扉でもある。

冴子は実桜を暖炉の前に立たせて着がえを手伝ってやる。ぱちぱちと火の粉が舞って、実桜の膚を赤く染める。少女は音もなく着がえをはじめる。痩せた少女の膚がいつもより少しふくよかに見えるのは、火の温かさのせいでありさっきまで少女を虜にしていた睡魔のせいだろう。ただまっしろにたおやかに降り積った白い世界の果てに、こんなにも豊かな空間があることを誰が信じるだろうか。

実桜は恥ずかしそうに胸元を隠す。冴子は手を伸ばして胸をさわる。実桜はふふっと短かい声をあげて目を閉じる。手の中で息づく肉の塊はいつのまにか女のものだと冴子は思う。実桜は薄く唇をあけて冴子に体重をかける。冴子はそのままミンクのコートの上に実桜を横たえて唇をうばう。少女の体には昨夜風呂上りにふったオーデコロンの香りがかすかに残っている。

冴子は目をあけて実桜の体をながめる。細い体についた胸のふくらみを嘗めながら、指を下半身にはこぶ。指にからまる下草をわけ乱暴に指をつっこむ。少女は痛そうに体を曲げだらりと人形のように横たわる。

冴子は汗ばんだ実桜の髪を撫でてやる。そして死人に化粧をしてやるように、バッグからレンガ色の口紅を出して、子指で紅を引いてやる。

「さあ、立ちなさい」

実桜はふらふらと立ってロングドレスを着はじめる。

「今夜、お客様が見えるわ。その時これを着るといいわ」

実桜は不機嫌さを口元に漂わせて共布のショールを首に捲く。

「その人、私たちといっしょに住むようになると思うわ」

「大事なことは全部一人で決めちゃうのね。この家に来たのもあなたと二人だと思ったからよ。他に女の子を入れるなんて」

「女じゃないのよ」「男」

「私の恋人かしら」「二人だけで楽しいじゃない。その人が住むなら、あたし出てくわ」

実桜は果実のような湿った唇をきゅんとかむ。胸元が大きくあいた大人っぽいドレスがかえって実桜を子供っぽく見せている。

「実桜がそうやってふくれてるととてもかわいいわよ」

冴子は手をのばしてバスケットから白ワインを取りグラスに注いでやる。かすかなアルコールの香りが霧のように部屋に籠る。

「女二人というのは何かとぶっそうだわ。泥棒よけに一人男がいると思えばいいのよ」

「Sは三角関係にしたいのね」

「二人よりはましだわ」

「あたしその人好きにならないわよ、きっと」

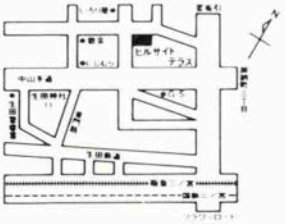
「私が選んだ人よ。あなたの好みぐらいわかるわよ。きっとお気に召すはず」「勝手ね」

実桜はあきらめてワインを口にする。　（つづく）

神戸・中山手通に
オープンしました

どうぞよろしくお願い致します
宮園　繁太郎

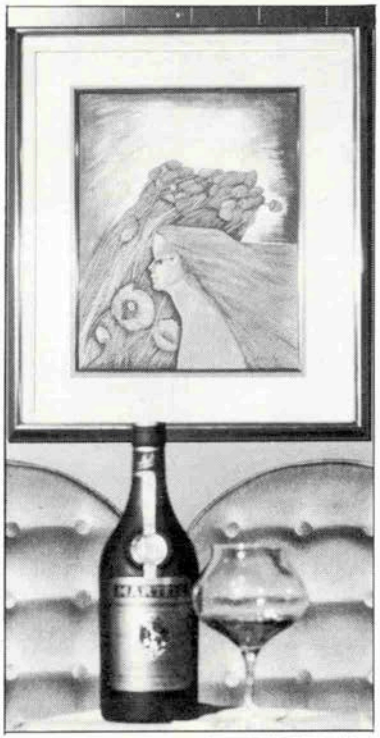
金属
bar
KINZOKU



神戸市生田区中山手通1丁目24-1
ヒルサイドテラスB1F
東専用階段下

TEL. 078-242-0124
PM6:00～AM2:00　日祭休

ハイセンスなあなたの社交場



毎夜8:00PM～0:20AMはピアノ演奏が入ります。
6:00PM～8:30PMは30名様までの貸切りパーティを承っています。

Pafe. 小姫
Kohime
梅沢　和子

神戸市生田区加納町４丁目２　神三ビル2F
TEL (078) 332－１０９８
6:00 PM～1:00 AM　日曜祝日休み

自由と正義の水たまり

第2回

蒼竜一
え・小西保文

しかし、都合の悪いことばかりでもなかった。外人観光客が例外なくくれるチップは正式の社員でないために遠慮なく自分の懐に入れることが出来る。そして、毎朝定刻に店に出る必要もない。たっぷり暇がある。もちろん暇があり過ぎると、妻（かつての社長秘書）が、店に電話をする。社長さーンという鼻にかかった声でも埒があかない場合には、社長と食事をして多少お酒の臭いを漂わせて帰って来る夜もある。彼女はこんな時、美容院へ出かけるというのが決まり文句になっている。尓は、（あの男俺達の生殺与奪の権を握っているつもりなんだな）というほど物騒なことは言わずに、ただ、

「大丈夫だったか」と聞く。これは、陳腐でちょっと変だとは思っているが、尓はなぜか強張ったような気持でいつも同じことを言ってしまう。すると、かつての大柄な社長秘書は、白い首をのけぞらせて嫣然と笑う。その媚態は、何度繰り返しても恐ろしい程煽情的であった。

ただ一番困るのは、夏と冬のボーナス時、仕事は暇である上に、新聞やテレビがボーナスを繰り返し浮かれるものだから尓のような立場に居る者にとっては、本当に傍迷惑な話である。妻の不満がいつ爆発するか、気が気ではない。まさに薄氷を踏む思いで一日一日を渡って行かねばならない。しかしそれさえやり過ごせば、尓の今の生業もそう悪いものではないと彼自身思っている。

翌朝九時頃起き出した尓は、ストーブをつけ、パジャマのまま、新聞紙を広げて、昨夜採って来た土筆の鞘を爪で剝ぎながら、その日の仕事の事を考えている。六畳一間に三畳位の台所がついた軽鉄骨の新築アパートである。アパートの東端にあるこの部屋には朝の光だけは良くはいる。ただ洗濯物を干す場所がないので赤ん坊が出来てからは部屋の中に襁褓などを干すと、もうそれだけで体格の良い妻は身の置き処に困ってしまう。彼女が立ち歩くには、余りにも狭いその空間の中で、必然的に横になっていることが多くなった。尓もまた、彼女が赤ん坊の側に長身を寄せておっぱいを含ませていたり、テレビのスイッチを入れたまま眠りこけていたりする時の方が、なんとなく落ち着いて居られるから妙な話だ。

鞘を剝ぎ終った土筆は、水で洗い鍋にかけお澄しにすることにする。醤油の煮えたぎる臭いを、尓は好きだ。そこへ卵をおとし、掻き混ぜると土筆の茎に卵が喰っ付き、その頃にはもう電気釜から蒸気が洩れ始めている。

崩れ始めると、二人の生活は人種の違い習慣等が、拍車をかけた。特に食い物が決定的に二人を引き離したと

たのではなかった。休暇が始まると同時に、ソフィは故郷に帰り、新しい恋人が出来たと云う便りを寄こしたまま、尓のもとには帰って来なかったのであったから。

やがて、妻がネグリジェのまま、起き出してきた。尓の背後から彼を抱くように軽く腕をまわし、背を屈めて彼の肩に顎をのせ、尓の前にある鍋を覗き込んだ。

「美味しそうな臭いがしてる。けど大丈夫かしらね」

妻はまだ蕁麻疹のことが念頭にあるらしい。尓は、首だけ振り返り、軽く妻の唇に触れる。昨夜の名残りが残っている。彼女は腰を振るように後じさりして彼から離れると

「今日の団体は、南部のお百姓さんだったかしら」

「そうらしい。でっかい物を好むテキサス人には大仏さんが一番だろう」

春らしい陽気になり、尓の仕事もここ当分は順調に続きそうであった。

昼前、尓は旅行代理店の社長とNホテルのロビーで落ちあった。そこで、尓の仕事の上前を刎ねているこの男の口から、この日の団体についてあらましのことを聞かされた。彼らは午前中、日本の農業の現状について大学教授の講演を聴いた後、ホテルで昼食を摂っていた。午後は市内観光。コースは大仏殿から二月堂三月堂をまわ

尓は考える。これまで辛抱していた凡てのものが食い物に形となって表れ始めた。尓は日課のように日本人街から刺身を買って来ては醤油をたっぷりつけて御飯にのせて食べる。味噌汁を沸かし、音を立てて啜りながら飲む。その前ではソフィが焼いている肉を苛立ちながら引っくり返している。オリーブの実を小皿に入れて目の前に置く。尓の嫌いなガーリックを肉に振りかけるのだが、心なしか何時もよりたっぷり振りかけているような気がしてならない。最後には、尓は箸を投げ出し、ソフィはフォークとナイフを皿の上に投げ出し、にらみあってひとしきり食い物について議論が始まる。がそんな愚にもつかぬ争いも、この日本人と米国女の間に長く続い

って春日大社の方へ抜けることになっている。そのコースを尓が案内する。

「五時に駐車場にバスを廻すから、時間を合わせてくれ。遅くなってもいかんし早過ぎてもいかん。五時だ。そこでお前の分担は終りだ」

社長は手帳を見ながら事務的に言う。彼の喋り方は尓に対する時には、特に早口になる。

この男、話の間の空白が恐いのかと尓は訝かりながら聞いている。そんな時、何時正式の社員にしてくれるんだと言ってやりたくなる。すると、益々社長の口調が早くなり、同じことを二度喋ったりの諄さが加わりうんざりしてしまうのだ。そして、こんな諄さには大抵の女はもう面倒臭くなって、どうにでもしていいわと言わんばかりにこの男の自由になってしまうのではなかろうかと、尓はふと妻のことを思い浮かべたりしながら聞いていた。

赤い絨毯の上に、ハイヒールや、大きな靴や長靴が現われ始めた。ロビーのソファに尓は深く腰を下ろして、ポケットから取り出した観光案内用の閻魔帳とも言えるものに目を通していた。アメリカ人は、歴史の浅い民族の特性かとも思われる程仏像を見ても建物を見ても何年位古いかと必ず訊ねてくる。古ければ良いなんてものじゃない筈なのに、彼等は古さに拘わる。尓は、古寺や仏像の古さを、それもその年代ではなく今から何年位前のものであるのかと云う彼等向きの表わし方で書いた一覧表を作成してやれば喜ばれるのじゃなかろうかと、一時まじめに考えたことがある位だ。

ひとしきり色んな靴がロビーを横切り玄関へ出て行ってしまうと、カウンターの所で支配人と話していた社長が戻ってきて、せわしく時計を覗き込みながら、あと五分だと告げた。バスはホテル正面に停車して居り、ロビーの客のほとんどを呑み込んでいた。社長は、ふと何気なくポケットに入れた手を一瞬とめて、怪訝な表情で何かを引っぱり出した。一通の外国郵便であった。あ、忘れていたと言いながら、尓に渡した。差出人はソフィである。ロスの友人宛の気付けで出されたものが、店の方に今朝転送されて来た模様である。

尓は、何も考える暇もなく封を切ると、斜めに読んだ。社長が時間だと言って尓の肩をたたいた。それを合図に玄関へ出て行きながら尓は目を文面から離すことができなかった。

バスに乗ると、乗客が注視する。尓は、自分がいま蒼白な顔をしていることを意識しつつ、上の空で自己紹介を済ませた。バスが動き、奈良へようこそとやって、ちょっと落ち着くことができたが、それでも胸は激しく鼓動を打ち続けていた。今日はもうとても駄目だと思う気持の一方で、なんとかあと数時間を遣り過ごせば楽になる、それまでの辛抱だと云う思いがそれにとって代っていた。尓は、一刻一刻の鈍い流れに堪えた。堪えようとすることによって、突然降って湧いたようなソフィの手紙に縛りつけられ、身動きのとれなくなることから免れてもいた。尓は、ソフィの手紙に書かれていた思いもかけぬ出来事の周辺をぐるぐる廻りながら、陽気なアメリカ人のお百姓達を案内してまわっていた。案の定、お客は大仏の前では重さは何頓あるか、高さはどの位かと、今配ったばかりのそれらが英語で印刷されてあるパンフレットを手にしたまま、訊ねた。

尓は、すかさず座ったままの高さを聞いているのか立ち上った時の高さを聞いているのかとやり返した。ここでいつもどっと湧く。何時も繰り返しているちっとも面白くない色褪せた冗談(ジョーク)だ。がしかし、誰も笑わないとなると、またちょっと感じが違ってくる。尓の表情は、強張った儘であった。しまったと思い、愛想笑いを作ろうとすると常日頃この男が侮蔑に近い気持で眺めてきた日本人特有のあの曖昧な多少卑屈さを帯びたニヤニヤ笑いになってしまった。尓は、なんとも惨めな自分を感じた。

「なぜ笑ってくれないんです。せっかく面白い冗談(ジョーク)をとばしたつもりなのに」尓は故意に卑屈な態度に出た。こ

こで、どっと笑った。お客も一時に気持が解れて

「案外面白い男なのね、最初はとても神経質で嫌な感じだったけど」太った老婦人の声に、また笑いが起きた。

「私、代理店が病人をガイドに寄こしたのかと思ったのよ」

「俺はまた、自分達がこの男を恐がらせて居るのかと思っていただ」

特別声の大きい、瘠せた男が言っていた。

この男は、年寄りなのか若いのか全く見当もつかないような男であったが、移動する折には尓の側にやってきて一緒に横を歩きながら話しかけて来る。尓はその頃から胃が痛み出した。下痢をしそうだ。

「俺達がイタリヤ戦線に居たときのことだ。我が軍は敵軍に囲まれてしまって、もう二進も三進も行かなかった。多勢に無勢、もういよいよ助からんと覚悟を決めて、そんなら俺らのテサス魂を見せてやるべえと思っていた矢先のことだ。その時救出に駆けつけてくれたのがなんと、日本人の部隊じゃないか。日本人は連合軍の敵じゃなかったのかと一瞬訳が分らなくなったが、我が軍にはドイツ人もイタリア人も居ることに思い至ってやっと納得したって訳だ。お陰で九死に一生を得たわ。それにしても日本兵の勇敢なことには、おら達おったまげてしもうた。あんなの全く後にも先にもありゃしないぞ」

男は酷い南部訛りの慣用句のずいぶん多い英語を喋った。尓は精神を集中して語句を追っかけていないと、危うく聞き逃がしてしまいそうだった。男は二世の狼犬部隊のことを言っていた。ここで手を差し出し意気投合したかの如く肩をたたきあい握手でもする話は、何処かの国の雑誌に一昔前には美談めかしてよく掲載されていたものである。このもと米国留学生は、そんな話には抵抗

を感ぜずにはおれない。

戦争に纏わる話に救った救われたの美談もあるまいと尓は思う。テキサス人の命を救ったと言うことは、即ちそれだけイタリア人、日本帝国の友軍を殺傷したと云うに過ぎないではないか。それにもっと筋を通せば、狼犬部隊は日本民族への裏切り行為とも言え、仮に日本が勝っていたら、彼らは無事では済まなかったろうし、裏切り行為と言えば、アメリカだってアメリカ国家の為に戦う兵士の親や兄弟を黄色人種であるが故に、多くユタ州の砂漠やネバダの有刺鉄線の中に押し込めていたではないか。すべて矛盾だらけで、醜悪な話さ。この瘠せた男だって、自由と正義のためなら人を殺したってかまわないと思っているに違いない。

曰く（偉大なる勇士、ジェファーソンは自由と正義のために戦いここに眠る。

曰く（最も勇敢なる誇り高き空軍の鷲、エディ軍曹）

曰く（自由と正義の戦士、シドニ

曰く曰く—

尓の目蓋に、今でもアーリングトン国立墓地の景観が浮んでくる。苗がきれいに植えそろった水田風景のように、アーリングトンの山腹を象牙の駒のような墓石が、等間隔に埋め尽くしていた。濃い緑を背に、夏の陽光が白い墓石に踊っている。何千何万と云うその広がりは、無気味と云うよりも、むしろ美しかった。

尓は益々腹が痛くなって来た。

「私は戦争を知らないので、あなたの言うことが分らないのです」そう言って最後に敬意を付け加えてやった。尓が関心を示さないと分ると、途端に瘠せた男は露骨に嫌な顔をして後ろに退った。すると、またソフィの手紙が気にかかり始めた。

尓は片手をズボンのベルトに差し入れ自分の掌が腹部を強く圧迫するようにして、痛みに耐えて歩いていた。その間もじっとりした汗が腰から冷めたい臀部にかけて木の芽のように吹き出してきた。嗚呼、何ということだ。青天の霹靂とはまさにこのことであろうか。

「大仏の頭部の色が違うが、いつ首が落ちたのかね」

お客の明るい声もあったものかは、尓は、猛烈に出口に向って突進した。後に残されたこの一団は、唖然として尓の走り去るのを見送っていた。尓はかなりの距離を腹部を圧えながら必死に駆け抜けると、入堂口脇にある公衆トイレにかけこんだ。

激しい下痢。早く仕事に戻らねばと、トイレを出た途端に、また襲ってきた。結局三度尓はトイレに引き返した。ようやく腹部の治まりかけた彼を捉えていたのは、激しい自己嫌悪とこれから起きるに違いない事柄への暗澹たる思いであった。

尓は、忙しなげにソフィの手紙を取り出したが、結局開くのをやめて再びポケットにしまった。そして赤電話の処に行った。受話器の向こうでおやじが叫んでいる、

「俺が行って代るまで、とにかく場をもたせておくんだ。今日に限って一体どうしたのだ。もしこのビジネスが潰れたら、お前にもそれなりの償いはしてもらうからな。覚悟しておけ」

まるでヤクザのようなことを云うと尓は思った。

こんなに怒っているおやじをまだ見たことがない。それなりの償いとは、金を支払えと云うことなのか、妻をなんとかすることなのか。彼は、一時に憔悴したようにとぼとぼ歩くと、本堂前に屯している観光客の処へ行き急に胃痛がし出したので、代りのガイドが来るまで待って欲しいと言った。待てって何分位だと云う容赦のない声が飛んだが、十分位後だと答えると、芝生の上に座り込んだり、堂内の土産物店に買物に行ったりする者があらわれた。

尓は大仏殿の大屋根の辺りに春霞を含んだ低い空があるのを見詰めながら、急に烈しい喉の渇きを覚えた。

（つづく）